

## 府中のビオトープを見つめて

### 第8回 生物多様性が大切な理由

生物多様性とは何か今一つわからないという。生物多様性は普段の仕事や生活と直接に関係がない。だから、こうした感想はごもつともであるし、そこに満足ゆく答を示すことも難しい。生物多様性とは、分類学者にとっては種の多様性であり、自然保護活動家には絶滅危惧種の生物の行方である。彼らには身近な問題に違いないが、世間では明らかにマイノリティに属する人たちの関心事にすぎない。大多数の人には何のことかさっぱりわからんということである。

生物多様性はそもそもただの言葉である。あるいは概念といってもよいかもしれない。デビット・タカーチが「生物多様性という名の革命」のなかにも書いているが、この言葉は1985年の米国で突如として現われた。それまでは生物学的多様性あるいは種の多様性が使われていた。何が違うかという「学」を取って科学のタガを外した。カビ臭い学問領域から広く市民に開放したといえは聞こえはいいが、言葉が発明される背景には社会の必然がある。生物や生態系にどうやらマズイことが起きているということらしい。私たちは環境問題を克服していかなければ未来がないことは、たぶん理解している。その一つに生物多様性の問題が強く意識されるようになった。スローガンに使う言葉を創って、政策を進めなければならなかったのである。

生態系サービスとは、生物多様性が私たちもたらす恩恵で、4つの働きに分けられる。

基盤サービスとは、生命活動が間接的に生み出す大気と水に代表される。供給サービスとは、私たちの生活に必要な食料や医薬品、化石エネルギーなどの消費財である。人の地域文化の多様性は生物や自然現象から学んできたが、これが文化的サービスである。調整サービスとは、森林によるCO<sub>2</sub>の吸収や洪水防止機能、気候安定機能などがわかりやすい例だろう。いずれも生物と生物の健全な関係があり、その連鎖が織り成す生態系から生み出されるものである。

生態系サービスはその存在自体が当たり前で、これまであまり意識されてこなかった。とくに自然が身近にあった日本人には、その損失とそれに伴う危機が現実としてとらえにくいのだろう。しかし、生物多様性が失われるとすれば、こうしたサービスが享受できなくなるということである。もしも、生態系サービスのすべてを人為で調達するならば、それは国家予算にも匹敵する。もちろん私たちの血税が使われる。ようは国民一人ひとりの経済的損失に直結するのだといえは、わかってもらえるだろうか。

環境問題は人間の経済活動が主な原因であるけれど、その多くは社会システムの改善で解決することができる。事実、過去の公害問題にしてもそうやってきたではないか。生物多様性も同じことである。私たち一人ひとりが意識を少しでも持って、できることから実行していけば、あまり余計な金も使わずに成果を挙げることができるはずである。もっともそうした世の中になれば、生物多様性という言葉もその役目を終えるのだろう。

---

執筆者紹介：新里達也

1級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。（株）環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。